

身体属性を表す軽動詞構文と意味編入

影 山 太 郎

1. はじめに

これまでの研究では日本語における軽動詞構文は「通学をする」のような VN (= Verbal Noun)+スル型の構文だけであると見なされてきたが、影山 (2003 予定) では、「アル」を伴った (1a) のような親族所有文と、(1b) のような動作主発生文も軽動詞構文として認定できることを明らかにした。

(1)a. 彼女には男兄弟がある。

b. 学会に参加者がたくさんあった。

これらの構文で「男兄弟が、参加者が」は指示性を欠く不定名詞句であり、「*彼女にあるのは男兄弟だ」のようにそれだけを取り立てたり、「*学会にその参加者があった」のように限定詞を付けたりすることができない。また、動詞の「アル」は(1a)では状態を表すが、(1b)では動作主の発生を表す。このような、ガ格名詞句と動詞「アル」の特異性を説明するために、上掲論文では、ガ格名詞の意味構造が主動詞「アル」の語彙概念構造に取り込まれることによって「N ガアル」全体で合成述語 (composite predicate) が形成されるという意味編入 (semantic incorporation) の考え方を提示した。

本稿では、この考え方の延長として、(2) のような「スル」を用いた構文便宜上、「身体属性文」と呼ぶ を考察する。

本稿は、平成14年度文部科学省科学研究費(基盤研究(B)(1)課題番号14310225, 基盤研究(C)(1)課題番号14510620)および2002年度関西学院大学個人特別研究費の援助を受けて行った語彙構造と統語構造の関係に関する研究の一部である。

(2) 身体属性文: 「主語ガ 形容詞 + 身体部位名詞ヲ シテイル」

彼女はきれいな髪をしている。 彼は魅力的な声をしている。

これまで、この構文に関する研究はほとんどなく、影山 (1980 b, 1990), Tsunoda (1995), Tsujioka (2002) が挙げられる程度である。一見したところ、「彼女はきれいな髪をしている」というのは「彼女」と「きれいな髪」の所有関係を表しているようである。しかし所有関係にあるものなら、何でもこの構文で使えるわけではない。ヲ格で標示される所有物として適格なのは「指、顔、頭、身体、目、鼻、口、歯、耳、手、足、首」などの身体部位や「声」や「姿」のような分離不可能所有物であり、「車、カバン」のような分離可能所有物や、「妻、兄」のような親族名詞は適合しない。

(3) *社長は {高級な外車 / 美人の妻} をしている。

(3) が伝えようとする意味を表すためには、「社長は～を持っている」あるいは「社長に～がある」という所有構文が必要になる。このため、同じ名詞を用いても、述語が「シテイル」と「アル」では解釈の違いが生まれる。

(4) a. 彼女は長い髪をしている。

b. 彼女には長い髪がある。

(4 a) は、彼女の 1 つの特徴として「髪が長い」ということを述べているが、他方、(4 b) では長い髪がそれだけで独立した物体として捉えられている。従って、(4 b) の長い髪は、取り外しできるカツラであることも可能であるが、(4 a) では長い髪がカツラの場合はいない。次の組では、同じ「目」でも意味が違うことが明白である。

(5) a. 彼女は澄んだ目をしている。

b. 彼女には目がある。(= 審美眼、鑑識眼)

本論では、(1 a, b) のアル構文と同じく、身体属性のスル構文も意味編入によって成立する軽動詞構文であることを示すが、その前に、この構文の特異性を整理しておく。

(6) 身体属性文の問題点

A. なぜ、この構文に「スル」が使われるのか。

- B. 同じ身体の一部を表す名詞でも、なぜ「いぼ、ほくろ、しらが」などでは使えないのか（*彼は、大きなほくろをしている）。
- C. なぜ、単純な現在形ないし過去形ではなく、「している」（あるいは連体修飾では「～をした N」）のように完了アスペクトが必要なのか。
- D. 「彼女は黒い髪をしている」に対して「*彼女は黒髪をしている」が不適格のように、なぜ、ヲ格名詞句に形容詞等の修飾語が必要なのか。

2. 装着を意味する「スル」

まず、(6A)の問題を考える。「スル」の1つの用法として、「ネクタイ／指輪／ネックレス／マニキュアをする」のように、「装身具を身につける」という意味の使い方がある（影山 1980 a）。装身具ではないが、様々な顔の表情も、ある程度、意図的にコントロールできるという点で、装着の「スル」の延長上に位置づけることができるだろう。

- （7）泣き顔をする、浮かぬ顔をする、知らん顔をする、知らんぷりをする、
おどけた顔をする、しけた顔をする、ふくれっ面をする、仏頂面をする、
しかめっ面をする

これらの表現は、時間の流れの中で、ある瞬間と次の瞬間とで同じ状態が維持されるとは限らないから、局面レベル（stage-level）の叙述である。

これに対して、本稿で問題とする「彼女は細い指をしている」などの身体属性文は、今だけに限られるのではなく、よほど特別のことがないかぎり、ほぼ恒常的に維持される状態を描写する。もっと言うと、「細い指をしている」というのは、主語（彼女）の性質を特徴づける個体レベル（individual-level）の叙述である。個体レベルの属性表現は、「その瞬間に」のような点的な時間副詞や、「私は～するのを見た／目撃した」のような物理的な知覚動詞とは相容れない。

- (8) a. 局面レベル：彼女は、その瞬間、ふくれっ面をした。
 b. 個体レベル：*彼女は、その瞬間、細い指をした。
- (9) a. 局面レベル：私は、彼女がふくれっ面をするのを目撃した。
 b. 個体レベル：*私は、彼女が細い指をするのを目撃した。

このように局面レベルか個体レベルかという違いはあるものの、「ふくれっ面をする」にも「細い指をする」にも同じ「スル」という動詞が用いられるのは、「スル」自体が本来的に「装着」という意味を持っているからであると考えられる。「装着」の意味を語彙概念構造で示すと、概略、次のようになる。

- (10) [Event[] CONTROL[Event[ACCESSORY] BECOME[State[ACCESSORY] BE AT[BODY-OF[]]]]]

y 項に対する選択制限を、便宜上、ACCESSORY と略記している。これは、「マフラー」なら「首に巻く」、「指輪」なら「指にはめる」といった機能が、特質構造の目的役割において記述された名詞を指す。そのような目的役割を持った名詞だけが装着の意味の「スル」に適合する（影山 1980 a）。そして、この ACCESSORY という選択制限がなくなって、代わりに「顔の表情」が y 項に入ると、(7) の表現になる。更に、y 項に「頭、口、耳、鼻、手」などの身体部位が対応すると、本稿で扱っている身体属性文の基礎ができる。ただし、単に、(10) の y 項を身体部位名称に置き換えただけでは、局面レベルの叙述であり、個体レベル叙述にはならない。なぜ、個体レベル叙述という意味が生じるのかは、第 4 節で説明する。

3. 身体部位と「できもの」

次に、(6B) の問題に移ろう。影山 (1990) では、「目、顔、髪」は当該構文に適合するのに、「いぼ、ほくろ、ひげ」などは適合しないことを指摘しているが、なぜそのような違いがあるのだろうか。当該構文に当てはまる名詞は「頭、髪、顔、口、鼻、耳、肌、手、足」などであるが、これらは、人間の身

体を作るために不可欠な分離不可能所有物であり、これらの有様はその人物そのものを特徴づけるだけの重要性を持っている。顔つき、肌の色、髪の色や長さなどはその人物の人柄そのものであるとさえ言えるだろう。そこで、これらの名詞の特質構造を次のように想定する。

(11) 身体部位名詞の特質構造

「顔」	形式役割: entity(<i>y</i>)	
	構成役割: PART-OF[]	
	主体役割: [[] BECOME [[] BE AT-TOP-OF[]]	

「顔」を例にとると、「顔」はその所有者である人間(*x*)の一部を構成し、Pustejovsky (1995)によると、全体・部分の関係は構成役割 (Constitutive role) で記述される。しかしそれだけでは不十分である。「顔」というものは、人間の身体の欠くことのできない一部分として、母胎にいるときに形成されるわけであるから、「顔(*y*)が人間(*x*)の胴体の上に形成される」ということを主体役割 (Agentive role) で記述しておくことが必要である。(11)の主体役割で重要なのは、BECOME という意味述語の主語として *x* (すなわち人間そのもの) を想定している点である。BECOME の主語は変化を被る主体を表すから (影山 1996), 顔(*y*)が出来上がることによって、その所有者である人間(*x*)そのものの全体像が形成される、ということを表している。顔以外の身体部位も、同じ形式の主体役割を持っている。これによって、例えば「彼女はきれいな目をしている」というと、単に「きれいな目」が彼女に「付着」しているというのではなく、「きれいな目」が彼女の人格の一部を特徴づける性質である、ということの意味するわけである。

これに対して、身体の一部であっても、「にきび、ふきでもの、おでき、いぼ、ほくろ」のように、人間の人格を形成しているとは到底考えられないようなものは、「シテイル」構文で使うことができない。

(12)*彼は、大きな{にきび/ほくろ/おでき/いぼ}をしている。

これらの「できもの」は、前述の「顔」などと異なり、人間が生まれた後で偶発的に発生するものであるから、人間そのものを本質的に特徴づけるとは考え

られない。そのためこれらの名詞の特質構造は、(11)の「顔」の特質構造と比べると、形式役割と構成役割は同じであっても、主体役割では BECOME の前に人間を表す主語がないと想定できる。

以上の考察から、身体属性文に用いられる名詞は決して恣意的に選ばれるのではなく、その語彙的な意味として主体役割に「人間に本来的に備わっている」ということが記載された身体部位名詞に必然的に限られるのである。

4. 局面レベル叙述から個体レベル叙述への変換

次に解決すべき問題は、(6C)の「なぜ完了アスペクトが必要か」ということである。すなわち、身体属性文は通常、単純な現在形ないし過去形ではなく、テイル形、あるいは連体修飾の場合はタ形で用いられる。

(13)a. *彼女は、そのとき、細い指をした。

b. *彼女は、毎日、細い指をする。

(14)a. 彼女は、細い指をしている。

b. 細い指をした女性

(13)が非文法的なのは、当該構文が局面レベル叙述ではなく、個体レベル叙述であるためである。では、なぜテイル形ないしタ形が個体レベルと関係するのだろうか。それは、テイルとタが変化結果を焦点化するという機能(影山 1996)から導き出される。すなわち、身体属性文の基となる身体装着文が前掲(10)のような語彙概念構造を持つとすると、その語彙概念構造において、「テイル」および「タ」は“[身体部位] BE AT[人間]”という結果状態を前景化する働きをしている。

しかしながら、単に結果状態を前景化しただけでは、(15)のように、叙述のタイプは局面レベルのままであって、個体レベルにはならない。

(15)a. 洗濯物は、ベランダに干してある。

b. ベランダに干した洗濯物

Kageyama (2002, 2004 予定)では、局面レベルから個体レベルに叙述

のタイプを変更する操作として、出来事項の抑制 (Event suppression) という考え方を提案している。それによると、語彙概念構造における最上位の Event が出来事項となり、それを抑制 (suppress) することによって状態性 (すなわち、個体レベル叙述) が得られる。また、多くの場合、出来事項の抑制は、何らかの文法項 (典型的には動作主) も付随的に抑制される。この考え方を身体属性文の概念構造に当てはめると、次のようになる。

(16) $\left[\begin{array}{c} \text{Even[} \quad \text{]} \\ \text{抑制} \end{array} \right] \text{CONTROl[} \begin{array}{c} \text{Even[} \quad \text{]} \\ \text{主語(彼女は)} \end{array} \text{BECOME[} \begin{array}{c} \text{Stat[} \quad \text{]} \\ \text{身体部位(細い指を)} \end{array} \text{BE AT[} \quad \text{]} \text{]}]$

一番外側の Event が抑制されることによって、行為者 (x) も抑制される。その結果、BECOME の主語である人間 (x) が統語的な主語として具現され、他方、BE の主語である身体部位 (y) は統語的な目的語となる。このように、身体属性文がテイル形ないしタ形を取るのは、個体レベル叙述を作るために結果状態を際立たせる必要があるからである。

5. ヲ格名詞句における主述関係

最後に、(6D) で指摘した問題点として、ヲ格名詞句における修飾語の有無を検討する。第一に問題となるのは、身体属性文のヲ格名詞句は名詞一語だけでは許容されず、通常は形容詞 + 名詞という統語構造を取るということである (影山 1980 b, 1990)。

(17)a. *彼女は {目 / 手 / 声 / 顔立ち} をしている。

b. 彼女は {澄んだ目 / きれいな手 / 美しい声 / 男性のような顔立ち} をしている。

(17 a) が不適格になる理由として、影山 (1980 b, 1990) では、身体部位単独では意味的に有意義な情報を伝えていないという語用論的な説明を示した。つまり、人間は誰でも目があり、髪があるから、(17 a) は「必要なことを必要なだけ語れ」という Grice 流の会話の公理に合わないために非文法的になるという考え方である。これに関して、Tsujioka (2002, 141) は、もし (17

a) のような文の不適格性が語用論的な情報の欠如によるのなら、否定文にすれば適格になるはずではないか、という Richard Larson からの指摘を紹介している。実際、(17 a) を否定文に変えても、適格性はまったく向上しない。

(18)*彼女は{目/髪/手/声/顔立ち}をしていない。

従って、(17 a) の不適格性は語用論的な情報価値の有無ということでは説明し切れない。

更に注目したいのは、たとえ意味的に等価であっても、形容詞+名詞ではなく複合語という一語をヲ格に用いたのでは、適切な日本語とならないことである(影山 1990)。

(19)a. 彼女は{美しい肌/*美肌}をしている。

b. 彼は{短い足/*短足}をしている。

c. 老人は{真っ白な髪/*白髪(はくはつ)}をしていた。

この制限に関して、Tsujioka (2002, 142, fn. 83) は、「黒髪(くろかみ)、青目(あおめ)、赤ら顔」は複合語であるが、当該構文で成立すると述べている。しかし筆者の判断では、「*彼女は黒髪をしている/黒髪をした女性」「*ジョンは青目をしている/青目をした男性」はいずれも不適格であり、成り立つのは「赤ら顔」だけである。

(20)a. 彼は、(私が見るときは)いつも、赤ら顔をしている。

b. 私は、彼が赤ら顔をしているのを写真にとった。

ところが(20)では、「いつも」という時間副詞や、「写真にとる」という述語が付いていることから、「赤ら顔をする」は局面レヴェルの叙述であると判断される。局面レヴェルの場合には、ヲ格名詞句に統語的な制限はなく、上掲(7)の「ふくれっ面、仏頂面」などのように複合語でも許される。

実際のところ、ヲ格名詞句が複合語で表されている例をインターネットで検索すると、(21)のような例が幾つも出てくる。しかしながら、筆者および複数のインフォーマントの判断では、これらは、いずれも不適格である。

(21)a. (*)日本人は黒髪をしている。(局面レヴェルの「彼女は今日は、金髪をしている」なら可)

- b. (＊)うさぎは赤目をしている。(「赤い目」なら適格)
- c. (＊)彼は{だんご鼻／ビール腹／たれ目／童顔／長身／美声}をしている。(ただし「馬面」は比較的許容できる。)

なぜ「形容詞＋名詞」という統語構造が要求されるのだろうか。この問題を解決する手がかりとして、奇妙な事実を指摘しておこう。一般に、存在・所有文における不定名詞句は all, every, most, each のような強い量化詞は受け付けないが, many, a few, あるいは three のような基数とは問題なく整合することが知られている (Milsark 1979, de Hoop 1996, 2003, McNally 1997)。

(22)a. There are {many/three/*all/*most} shops in the town.

- b. 彼には兄弟が {3人／たくさん／*すべて／*たいてい} ある。

ところが、身体属性文では、強い量化詞だけでなく弱い量化詞も排除されてしまう。

(23)a. *彼女は細い指を {たくさん／10本} している。

- b. *その少女は、つぶらな瞳を2つしている。

なぜ、当該構文は弱い数量詞を排除するのだろうか。

身体属性文の意味を分析的に考えてみよう。「彼女は細い指をしている」という文は、「彼女は指が細い」と言うのとほぼ等しい意味を持っている。すなわち、「細い指」というのは、統語的には「指」という名詞をヘッドとする連体修飾構造であるが、意味的には「指が細い」という主述関係 (predication relation) を表していると考えられる。実際、一般に、主述関係の叙述文では、先ほど見た量化詞がいずれも適合しない。

(24)*彼女は指が {たくさん／10本} 細い。

(24)の非文法性は、先ほどの(23a)の非文法性と並行している。(24)が不適格である理由は、「指が細い」という部分が主述関係にあり、しかも、「指がたくさん／10本」という部分も同じように主述関係を結ぶので(影山 2002b), 主述関係が重複するからであると考えられる。((23a)×(24)ともに、「10本とも」や「5本だけ」とすると良くなるが、これらは「彼女は指が細い」という命題全体を作用域にとる量化詞として働いているので、統語構造が異な

る。)そうすると、「細い指をしている」の「細い指」は、概念構造では文字通りの「細い指」という個物ではなく、「指が細い」という状態を表していると考えることができる。

このように統語構造と意味解釈にずれがあることは、日本語でしばしば見られる。「早耳、太っ腹」などの形容詞的な複合語がその例である。「早耳(だ)」というのは、耳そのものではなく、「耳がはやい(つまり、ニュースをはやく聞きつける)」という性質を表す (Kageyama 2001, 影山 2002 a)。

このように考えると、「彼女は細い指をしている」の概念構造は、概略、「彼女は、指が細いという状態(そういう身体特徴)を持っている」というように分析できる。そこで、先ほどの(16)を修正して(25)のような概念構造を想定することができる(波線部が主述関係に当たる)。

(25) [] CONTROL[[彼女] BECOME[[Property [指] BE AT[細い]]] BE AT[[]]]

統語的には「細い指」という連体修飾であっても、概念構造では「指が細い」という主述関係であるとすれば、ヲ格名詞句に形容詞による修飾が必要であるという特異な制限に対して、意味構造から端的な説明を加えることができる。すなわち、統語的に形容詞がなければ、概念構造における主述関係が保証されないわけである。(25)の波線部が Property (属性) であることは、それに対応する「細い指」の統語範疇が DP ではなく NP であること(後述)から導き出され、更に、Property という指定によって、連体修飾関係が主述関係に自動的に組み替えられる。この分析によれば、先に(21)で触れた複合語を許す話者に関しても、説明が可能となる。すなわち、そのような話者は、例えば「黒髪」という複合語を、概念構造では「髪が黒い」というように主述関係に分解して解釈できるということである。複合語でも漢語より和語の方が許容されやすい (Tsujioka 2002, 142) のは、「主語 + 形容詞」という関係に再解釈されやすいからであると考えられる。

6. 軽動詞構文としての性質

身体属性文の一般的な特徴を述べたところで、本稿の目的である「軽動詞構文」としての性質を検討することにしてしよう。影山（2003 予定）では、これまで頻繁に論じられてきた「九州に出張をする」のようなスル構文だけでなく、冒頭（1 a, b）に例示した「兄弟がある，参加者がある」というアル構文も軽動詞構文であることを明らかにしている。軽動詞構文の一般的性質として、これらのヲ格ないしガ格名詞句は指示性を持たない（Milsark（1979）の言う定性効果（Definiteness Effects））。定性効果を示すという点では、本稿の身体属性文に生じるヲ格名詞句もそうである。

- （26）a. *彼女は，その長い髪をしている。
 b. *彼女はそれをしている。
 c. *彼女がしているのは，長い髪だ。
 d. *彼女がしている長い髪は母親譲りだ。

「ネックレスをする」のような装身具や、「それを聞いて父は〔暗い表情／しかめっ面〕をした」のような局面レヴェルの顔つきなら、定性効果を持たず、（26）の構文に適合することに注意。一般に、指示（reference）を持つ名詞句は DP であるから、指示性のない「長い髪を」などの名詞句は D を持たず、単に NP だけであると分析できる（Borer 1994）。

軽動詞構文において動詞に統率された名詞句は、このように NP という範疇である。しかし文中において、NP だけでは自立できないので、述語に意味解釈を依存する「述語修飾語（predicate modifier）」となる（de Hoop 1996）。van Geenhoven（1998）は一歩進んで、グリーンランド・エスキモー語においては弱い格を持つ不定名詞句は動詞に「意味的に編入される」と論じている。

影山（2003 予定）では更に進んで、軽動詞としてのスルとアルは、一人前の語彙概念構造を持たず、骨組みだけ（skeletal）の意味構造を持つ未熟な動

詞であると論じている。すなわち、「兄弟がある，参加者がある」の構文に用いられたアルは(27 a)，VN+スル構文のスルは(27 b)の構造を持ち，その未指定の部分(点線部)はそれぞれが統率する名詞の語彙概念構造あるいは特質構造から必要な意味情報を取り込んで，一人前の述語となる。

(27)a. 軽動詞としてのアル：．．．[] BE．．．

b. 軽動詞としてのスル：[] CONTROL．．．

身体属性文においても，スル自体は(27 b)の骨格しか持たないと考えられる。(27 b)の CONTROL 以下の点線部分は，先に(11)で示した身体部位名詞の主体役割に記載された意味構造がコピーされて補充される。その結果として得られる概念構造に出来事項の抑制を適用したのが(16)の構造である。

最後に，意味編入が実際に編入すなわち主要部から主要部への移動であることは，身体部位名詞のあとに別の名詞を付けると当該構文が成立しないことから示される。

(28)*彼女は澄んだ目のゴミをしている。

(28)では，「ゴミ」が介在するために「目」から「する」への意味編入が阻止されている。

7. ま と め

本稿では，これまで等閑視されてきた身体属性文を軽動詞構文として分析した。軽動詞構文は名詞と動詞の両方の性質に依存する。名詞の側では，指示性がないということが動詞への依存を促し，他方，動詞の側では，骨格的な語彙概念構造しか持たないために名詞から意味情報を吸収することが必要となる。更に，身体属性文においては局面レベル叙述を個体レベル叙述に変換する操作が働いているものと思われる。このように，種々の操作がモジュール的に作用しあって，この構文が成立する。

Tsunoda (1995) や Tsujioka (2002) が指摘するように，所有という状態性の概念を「スル」という動作動詞で表現することは，世界的に稀であると言

えよう。しかしながら、なぜこの構文にスルが使われるのかを、本稿のように軽動詞という観点から考察すれば、この構文が決して不思議な現象ではないことが理解される。まず、「きれいな目をしている」というのは厳密に言えば所有ではなく、「目がきれいだ」という主述関係の存在を表す。また、日本語では、スルとアルの2つの動詞が軽動詞となる資格を備えており、一緒に用いられる主語ないし目的語によって、それぞれが状態性をも動作性をも担うことができるわけである。

参考文献

- Borer, Hagit (1994) "The Projection of Arguments," *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics* 17, 19–47.
- de Hoop, Helen (1996) *Case Configuration and Noun Phrase Interpretation*. New York: Garland.
- de Hoop, Helen (2003) "Partitivity," in Lisa Cheng and Rint Sybesma (eds.) *The Second Glot International State-of-the-Article Book*, 179–212. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 影山太郎 (1980 a) 『日英比較 語彙の構造』松柏社。
- 影山太郎 (1980 b) 「語彙意味論の問題 語彙分解と典型」『言語文化研究』6, 1–20。大阪大学。
- 影山太郎 (1990) 「日本語と英語の語彙の対照」玉村文郎 (編) 『日本語の語彙と意味 (講座日本語と日本語教育第7巻)』1–26。明治書院。
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版。
- Kageyama, Taro (2001) "Polymorphism and Boundedness in Event/Entity Nominalizations," *Journal of Japanese Linguistics* 17, 29–57.
- Kageyama, Taro (2002) "On the Role of the Event Argument in Voice Alternation," 『人文論究』52/1, 79–96.
- 影山太郎 (2002 a) 『ケジメのない日本語』岩波書店。
- 影山太郎 (2002 b) 「概念構造の拡充パターンと有界性」『日本語文法』2/2, 29–45.
- 影山太郎 (2003 予定) 「存在・所有の軽動詞構文と意味編入」『日本語の分析と言語類型』(仮題) くろしお出版。
- Kageyama, Taro (2004 予定) "Property Description as a Voice Phenomenon," in Tasaku Tsunoda and Taro Kageyama (eds.) *Voice and Grammatical Relations*. Amsterdam: John Benjamins.
- McNally, Louise (1997) *A Semantics for the English Existential Construction*.

- New York: Garland.
- Milsark, Gary (1979) *Existential Sentences in English*. New York: Garland.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Tsujioka, Takae (2002) *The Syntax of Possession in Japanese*. London: Routledge.
- Tsunoda, Tasaku (1995) “ The Possession Cline in Japanese and Other Languages , ” in Hilary Chappell and William McGregor (eds .) *The Grammar of Inalienability*, 565–630. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Van Geenhoven, Veerle (1998) *Semantic Incorporation and Indefinite Descriptions: Semantic and Syntactic Aspects of Noun Incorporation in West Greenlandic*. Stanford: CSLI Publications.

文学部教授